

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10410

研究課題名(和文) 注意欠如・多動症児の母親におけるマターナルアタッチメントの関連要因

研究課題名(英文) The relation between the characteristic behavior of the children and maternal attachment

研究代表者

眞野 祥子 (MANO, Shoko)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：90347625

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ADHD児の母親のマターナルアタッチメント(MA)と子どもの行動特徴との関連を明らかにすることを目的とする。学童期のADHD児と定型発達児の母親を対象とし、ADHD-RS-J、ODD尺度、CD尺度、MA尺度への回答を求めた。結果、ADHD-RS-J、ODD、CD尺度は定型発達群よりADHD群の方が有意に得点が高かった。MA尺度はADHD群の方が有意に得点が低かった。2群において、子どもの行動特徴とMAとの関連をPearsonの関数相関係数で検討した。結果、ADHD群は多動/衝動以外はMA間で有意な正の相関を認めたと、定型発達群はCDのみMAと関連を認めたと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

母親から子どもへの愛着の問題は虐待との関連が指摘されているが、実際、ADHD児は虐待を受けるリスクが高いといわれている。また、二次障害合併の要因の1つに、養育者とのネガティブな相互関係が考えられている。よって健全な親子関係を構築できるよう援助方法開発が急務である。本研究で明らかになったMAと関連する子どもの行動特徴を手がかりとして、母子への援助方法開発が可能となる。また、明らかになった関連要因を危険因子とみなしてADHD児と親をケアすることで、母子関係破綻の予防・早期発見につなげることができる。

研究成果の概要(英文)：OBJECTIVE: This study examined that the characteristic behavior of children with ADHD are associated with maternal attachment in comparison with mothers of typically developed children attending regular school classes (controls). METHODS: Seventy-nine mothers of children with ADHD and the same number controls were involved in this study. The following measures were used ADHD Rating Scale (ADHD-RS), ODD Scale, CD scale and MA scale. Data was analyzed using Pearson correlations. RESULTS: There were significant statistical differences between ADHD's mothers and controls in the characteristic behavior and MA by the unpaired t-test. ADHD-RS, ODD scale, CD scale were significantly higher in mothers of children with ADHD. And MA scale was significantly lower in mothers of children with ADHD. As for the ADHD group, the inattentive scores of the ADHD-RS, ODD scores and CD scores were correlated with the MA scores. As for the control group, CD scores was correlated with the MA scores.

研究分野：精神看護学

キーワード：発達障害 愛着 マターナルアタッチメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

母親から子どもへの愛着は、マターナルアタッチメント(maternal attachment: 以下、MA)と呼ばれ、「母親が人生の中で、子どもが最も重要な位置を占めていると感じている程度」と定義されている(Robson and Moss, 1970)。注意欠如・多動症(Attention-deficit/hyperactivity disorder: 以下、ADHD)児に特徴的な行動(不注意/多動)が、母親の子どもに対する愛着であるMAを減少させ、その結果、厳格で非難的な養育態度になることが申請者の研究で示唆された(眞野, 2007)。ADHD児の母親の養育態度が厳格となる背景に、子どもの行動特徴がMA形成を妨げていることが疑われた。

2. 研究の目的

本研究は、ADHD児の母親のMAと子どもの行動特徴との関連を、定型発達児の母親と比較して明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象及び調査方法

ADHDと診断された学童の母親(ADHD群)を対象とした。質問紙の配布は、研究協力者の医師、親の会を介して母親に依頼した。対照群は、ADHD群の子どもと母親の属性が類似した定型発達児の母親を対象とした。

本研究の具体的な調査方法に関して、摂南大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の審査を受け承認された。対象者に、書面を用いて研究の目的、方法、意義について十分説明し、理解を得ることができた者のみを対象とした。いつでも同意を取り消すことができ、同意を取り消すことによって何ら不利益を被らないことを説明した。この際、対象者が自由に参加の意思決定ができるように配慮した。質問紙は無記名とし、質問紙に返信用封筒を同封して郵送にて回収した。

(2) 調査内容

1) 属性調査用紙

母親の年齢、子どもの年齢、子どもの性別、きょうだいの人数、家族形態、母親の就労状態について質問紙を作成した。

2) MA尺度

眞野(2018)が作成したMA尺度を用いた。本尺度は、一般的には乳幼児の母親を対象として作成されているMA尺度の質問項目や因子を参考に、学童期の母親に特化して作成された。子どもとの交流をとおして覚える感情である「対児感情」、子どもの性格、気持ち、考え、子どもが出すサイン等の理解に関する項目である「子どもの理解(以下、理解)」、子どもに対する献身的な態度や関わり、子どもとの関係性に関する項目である「子どもに対するあたたかい態度(以下、態度)」の3因子構造、合計18項目で構成されている。「全くそのとおり」5点から「全く違う」1点の5件法で回答を求めた。得点が高いほど愛着感が高いことを示す。

3) 子どもの行動評価:

a. ADHD RS- 日本語版

子どものADHD傾向を測るため、ADHD Rating Scale- (ADHD-RS)日本語版を用いた。この尺度は、ADHDの主な行動特徴である「不注意(9項目)」と「多動性・衝動性(9項目)」の2下位尺度で構成されている。4件法で回答を求めた。

b. 反抗挑戦性評価尺度(原田, 2002)

原田ら(2002)が作成した本尺度は、合計8項目で構成され、感情制御、反抗性、挑戦性の重症度を測定できる。4件法で回答を求めた。

c. 行為障害評価尺度

診断基準をもとに15項目を作成し、「あてはまる」「あてはまらない」の2件法で回答を求めた。

(3) 統計解析

ADHD群と定型発達群の属性の比較は、年齢(子ども、母親)は対応のないt検定、子どもの性別、家族形態、兄弟姉妹の数、母親の就労状態は2検定を用いた。両群の変数ごとの比較には対応のないt検定を用いた。子どもの行動特徴とMAとの関連は、Pearsonの積率相関係数を求めた。

4. 研究成果

(1) 対象者の属性

欠損値が見られた対象者のデータを省き、ADHD群、定型発達群ともに79名を分析対象とした。

ADHD 群は平均年齢 9.86 歳であった。対照群は平均年齢 9.33 歳であった。

(2) ADHD 児と定型発達児の行動特徴と MA の得点比較

ADHD-RS-J、ODD、CD 尺度全てにおいて、ADHD 群の方が定型発達群より有意に得点が高かった。MA 尺度に関しては、ADHD 群の方が有意に得点が低かった。よって ADHD 群の方が行動特徴が強く、母親から子どもへの愛着感も低いことが考えられる。

(3) ADHD 児と定型発達児の行動特徴と MA との関連

ADHD 群について、子どもの行動特徴と MA との関連を検討した。結果、ADHD の行動特徴である不注意は MA 尺度の「対児感情」「態度」と有意な負の相関を認めた。また、ODD は、MA 尺度の「理解」「態度」と有意な負の相関を認めた。CD に関しては、MA 尺度の全ての因子と負の相関を認めた。

一方、対照群は CD のみ MA 尺度の全ての因子と負の相関を認めた。

(4) 子どもの行動特徴と MA との関連

本研究の結果から、定型発達群と比較して、MA3 因子すべて ADHD 群の方が有意に低く、行動特徴もすべて ADHD 群の方が有意に高かった。また、ADHD 児の不注意の行動特徴は、MA の「対児感情」「態度」と有意な負の関連を示したが、多動・衝動的な行動は、「対児感情」「理解」「態度」の 3 因子とは有意な関連を認めなかった。ADHD、PDD、自閉症を含む発達障害児の保護者の養育スタイルの特徴を検討した中島ら (2012) の研究では、子どもの不注意な行動特徴が子どもを褒めたり可愛く思ったりする「肯定的働きかけ」と負の関連を示すが、多動衝動性と「肯定的働きかけ」は有意な関連を認めなかったことを明らかにしている。松岡らが作成した養育スタイル尺度の「肯定的働きかけ」の項目は、例えば、「子どもを褒めることが多い」「子どもの成長が楽しみになってきた」のように肯定的な項目で構成されている。本研究の MA 尺度の「態度」も、例えば「子供が泣いていると慰める」「子どものためなら何でもする」「対児感情」は、例えば「子どもと交流することが楽しい」のように肯定的な項目内容で構成されており、松岡らの「肯定的働きかけ」と同質とみなすことができる。よって、松岡らの「肯定的働きかけ」と不注意と多動・衝動的な行動特徴との関連の仕方については、本研究結果と一致するものとみなすことができる。

一方、中島ら (2012) は、養育スタイルの「叱責」は、不注意、多動性・衝動性ともに有意な関連を示していると述べている。「叱責」は negative な養育態度である。本研究は、「母親が人生の中で、子どもが最も重要な位置を占めていると感じている程度」であるマターナルアタッチメントの程度を測定している。一般的な MA 尺度と同様に、本研究で使用した MA 尺度は肯定的な質問項目だけで構成されている。しかしながら菅原 (1989) は、アカゲザルの母性行動を研究した Hinde らの研究結果から、ハザルの凝視の中には、「愛情」だけでなく「攻撃」を意味することもあることが明らかにされていることから、MA の否定的側面についても注意を傾ける必要性を指摘している。よって、MA の因子構造等の特性についての検討が今後は必要であると考えられる。

ADHD 児が学童期になると、注意力や集中力の困難さから、学習上の困難が明らかになってくる。ADHD 学童の親を対象とした研究では、多動・衝動的な行動ではなく不注意が学業成績や親子関係に関与していることを示す先行研究は散見される (Evans SC et al. (2020)。例えば、Gau ら (2013) は、平均 12.62 歳の ADHD と診断された子どもの母親を対象として、子どもの ADHD の行動特徴と親の養育態度、母子関係との関連を検討している。結果は、子どもが不注意ほど母親の愛着感/世話が少なく、母親は支配的になることを明らかにしている。その要因としては、不注意の症状は青年期になっても長く続き、成績不良と不安と関連があり、母子相互関係に影響を及ぼすこと、特に子どもの不注意な特性は、他者から不従順とみなされ、子どもの不十分な社会性や学業成績のことで母親は責められる。このような苦勞は、夫婦不和や親子間の衝突に結びついてしまうことを指摘している。ADHD の症状は、母親のネガティブな感情を引き出し、ポジティブな感情はほとんどない (Maniadaki et al., 2005)。このように、怒りのようなネガティブな感情は、厳格、叱責、体罰等の養育態度と関連する。従って、ADHD 児の不注意な行動特徴は、母親の子どもに対するあたたかい感情を減じてしまうとともに、子どもに対する態度にも影響を及ぼしている可能性が考えられる。

「理解」は、ADHD の行動特徴とは関連を示さなかった。本研究の「理解」は、「子どもの出すサイン (合図) を理解できる」「子どもの考えや気持ちを理解できる」のような質問項目で構成され、障害理解の意味合いも含まれる。「対児感情」と「態度」は、子どもの行動特徴に影響を受けやすいが、障害理解を含めて信念のような感情は、子どもの行動特徴の影響を受けにくいことが考えられる。

< 引用文献 >

Robson KS & Moss HA (1970): Patterns and determinants of maternal attachment. J

Pediatr, 77, 976-985.

眞野祥子, 宇野宏幸 (2007): 注意欠陥 / 多動性障害児の行動特徴と母親の養育態度間の関連性. 脳と発達, 39, 19-24.

眞野祥子, 宇野宏幸, 堀内史枝, 西本佳世子, 高宮静男 (2018): 注意欠如・多動症児の母親におけるマターナル・アタッチメントの特徴. 児童青年精神医学とその近接領域, 59(4) 614-630.

原田謙, 今井淳子, 佐久間文子, 田丸恒美, 齊藤万比古, 飯田順三, 岩坂英巳, 内山登紀夫, 太田節子, 笠原麻里, 小枝達也, 平林伸一, 平林道子, 山田佐登留, 吉田友子 (2002): 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費研究報告書 注意欠陥/多動性障害の診断・治療ガイドライン作成とその実証的研究平成 11~13 年, 59-65.

中島俊思, 岡田涼, 松岡弥玲, 谷伊織, 大西将史, 辻井正次 (2012): 発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴. 発達心理学研究, 23(3), 264-275.

菅原ますみ (1989): 母親の子どもに対する愛着. 小児看護, 11(4), 409-414.

Evans SC, Cooley JL, Blossom JB, Pederson CA, Tampke EC, Fite PJ. (2020): Examining ODD/ADHD Symptom Dimensions as Predictors of Social, Emotional, and Academic Trajectories in Middle Childhood. J Clin Child Adolesc Psychol, 49(6), 912-929.

Gau SS, Chang JP (2013): Maternal parenting styles and mother-child relationship among adolescents with and without persistent attention-deficit/hyperactivity disorder. Res Dev Disabil. 34(5), 1581-1594.

Maniadaki K, Sonuga-Barke E, Kakouros E et al. (2005): Maternal emotions and self-efficacy beliefs in relation to boys and girls with AD/HD. Child Psychiatry Hum Dev, 35, 245-263.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 眞野 祥子 , 宇野 宏幸 , 堀内 史枝 , 西本 佳世子 , 高宮 静男	4. 巻 59 (5)
2. 論文標題 注意欠如・多動症児の母親におけるマターナル・アタッチメントの特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 614-630
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Shoko Mano, Hiroyuki Uno, Azusa Kawakami
2. 発表標題 The relation between the characteristic behavior of the children and maternal attachment.: comparison between mothers of children with ADHD and controls
3. 学会等名 第18回国際児童青年精神医学会議 18th International Congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	川上 あずさ (KAWAKAMI Azusa) (00434960)	奈良県立医科大学・医学部・教授 (24601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------